

Le Blanc, H.

**The art of tying the cravat: demonstrated in sixteen lessons, including thirty-two different styles forming a pocket manual... preceded by a history of the cravat... 2. ed.**

London, Effingham Wilson, 1828. (文献番号4-224)

ルブラン著

クラヴァットの結びかた16課

ルブラン男爵 (H. Le Blanc, Esq.) によって著された『クラヴァットの結びかた16課』(2版)は、パリで1827年に出版された *L' art de mettre sa cravate de toute des manières...* の英語版である。ルブラン(仏語で白の意)男爵も偽名であるが、フランス語版では、ランブゼ男爵 (Le Bon Émile de L' Empesé—糊付けした、あるいは堅苦しいエミール男爵の意) の偽名で書かれている。文献目録等では、著者の本名をサンティレール (Saint-Hilaire, Émile Marc Hilaire, known as Marco de) としているが、作家のバルザック (H. de Balzac) とする説もある。フランス語版の印刷所は H. Balzac となっており、バルザックが印刷業に携わっていた時期とも重なっていることから、何らかの形でかかわりを持っていたようである。

クラヴァットは、ネクタイの意味のフランス語であるが、今日のように概してネクタイが細長い形になる以前、17世紀から19世紀にかけてのスカーフ状の男子服の衿元装飾の名称でもある。服飾辞典によるとルイ14世時代のクロアチアの騎兵(クロアット)が首にまいていたスカーフが起源であり、クロアットがなまってクラヴァットになったとされている。第一帝政時代に、モードの王様といわれたジョージ・ブライアン・ブランメルがそれまでの柔らかいクラヴァットに対して固く糊付けしたクラヴァットをつけて現れてからは、クラヴァットの手入れと結びかたはダンディたちの熱狂的な関心の対象となった。その扱いかたと結びかたの複雑さのためにいくつかの手引書が出版されたが、本書もその中の一冊である。この本は多くの版を重ねた様子で、1828年にパリで改訂、増補、彩色をした9版、1827年にミラノ版、1828年にナポリ版—このイタリア版2冊の著者はサルダ (Conte Della Salda—糊の意味) 男爵—が発行された。また、アメリカでは1828年に本書をもとにしたフィラデルフィア版、1829年にロンドン版11版をもとにしたニューヨーク版などが発行されたことが文献目録中に確認されている。

標題が示すとおり、内容はクラヴァットのつけ方32種を16の章に分けて解説した小型の手引き書であり、4枚のプレートに32の挿絵が描かれ、東洋風の結びかた、パイロン風の結びかた、滝の形の結びかた、美食家風の結びかたなどユニークな名前を紹介しながら、結びかただけでなく、その由来、使う場合、使われる色などにもふれ、クラヴァットの手入れ・扱い方なども説明してある。前書きでは、クラヴァットの歴史が哲学的、倫理的、政治的な観点から書かれ、その社会的影響についても述べられており、クラヴァットの重要性についてやや皮肉をこめて半分実用的に半分おもしろく書かれている。

本書および異版は本文・図版ともに後の著作にもしばしば引用されており、服装史のネクタイについて述べられている部分で『クラヴァティアーナ』Cravatiana. Paris, Ponthieu, 1823. などと並んで見ることができる。これらの著作のなかには、本書がバルザックの著作であると断定的に述べているものもある。

図は、本書の折込み図版Cの「クラヴァットの結び方」で呼称はフランス語のままである。ひとつの図で複数の結び方の説明をかねているものもある。 (柳沼)

